

自力建設による都市共同体の建築

市民農業大学校を核とした公共的空間の構築

Self-built Architecture for Contemporary City Communities

Creating a New Common Space generated from the Agriculture College for Citizens

奥山研究室 13M30021 浅子 雄祐 (ASAKO, Yusuke)

keywords : 自力建設、共同体、農業、公共的空間、農業大学校
self-build, community, agriculture, common space, agriculture college

1. 序 かつて人々は日常的な居場所を自らの手で設え、その仕組みを理解し維持管理してきたが、近代管理社会の成熟を通して、現代では原則すべての建築行為が行政によって規制され、市民も行政に厳格な管理を求める傾向にある。こうした状況は市民の日常生活と「建てること」の連関を切り離し、災害などの非常時における市民の対応力を低下させるだけでなく、日常的な居場所のために自らが思考し行動するという人間本来の精神性を衰退させ、結果として人々の居場所の持続性が失われつつある。こうした状況を打破するために、市民自らが主導となって生み出す公共的空間のモデルが必要である。そこで本計画は自力建設に関する法的事項を整理したうえで(図1)、都市共同体¹⁾という現代的な人的連携によって長期的に建設および運営される市民農業大学校(以下、ACC)を核とした公共的空間の構築手法を提示することを目的とする。ケーススタディとして市街化調整区域の中でも市街化区域に囲まれている横浜市港北ニュータウン(以下、港北NT)南部の農業専用地区境界部を計画対象とする。

2. ACCによる都市共同体の形成 ACCは地域の元営農者や農業従事者による授業や地域住民への収穫物の販売など、

市民と関わる多様な活動を有することから、都市共同体の形成に適した用途である。そこで、農林水産業に関する学校を対象に、活動内容と市民との連携のあり方を整理した(図2)。その結果、活動内容が施設内で完結するものから、限定的に学校施設を一般開放して市民と関わるものまで広がりがみられた。後者であっても、日常的に市民の居場所となる施設のあり方はみられず、この点を考慮することが都市共同体の形成において重要だと考える。

3. 自力建設による都市共同体の建築

3-1. 都市共同体の建築とプログラムの構想 港北NT南部に位置する折本、東方、池辺、大熊の4つの町は農業専用地区を有する。また、この地域には農地を所有しているにも関わらず農業を後継できない若者が存在している。そこで彼らが、所有する農地を有効活用するために農地活性化法人を設立するというストーリーを想定し、農業専用地区の境界部に市民と協働してACCを自力建設する計画を提案する。本計画における都市共同体とその拠点となる施設群の関係性を示したものが図3である。農地活性化法人はACCと農地バンクを運営し、借り上げた遊休農地をACCの実習場として活用する。ACCと農地バンクを中心に、農地の所有者や就農希望者を始め、工場経営者や



図1. 港北NT南部農専の地理と法的手続き

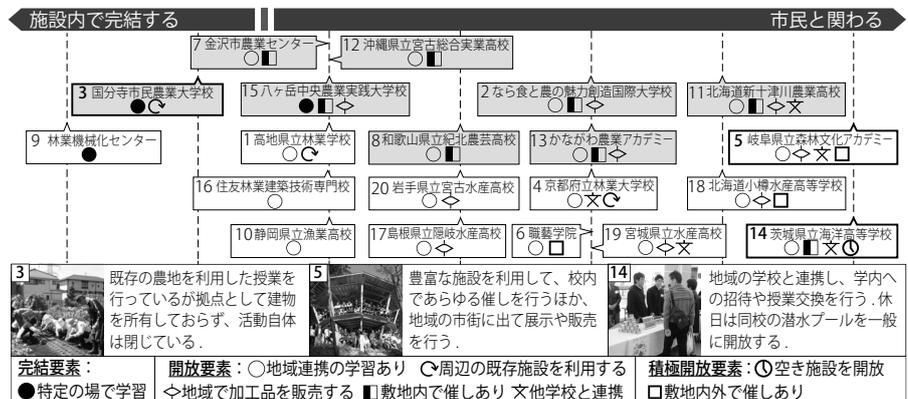


図2. 農林水産業に関する学校施設における学習プログラムと市民の連携

元大工などの市民が行為やモノなどを媒介に都市共同体に参入する。ACCの拠点として、野菜学校を核とした施設群、果物学校を核とした施設群、宿泊施設群を建設する。貸し教室の一般開放などによって市民の活動拠点として利用できるよう計画し、宿泊施設に滞在する学生の食堂の利用など施設間の相互活用や近隣の幼稚園から児童預託を行うなど既存施設との連携を促す。また、都市共同体の構成員ごとの建設作業への参加の度合いも示している。さらに、全ての施設を自力建設しながら全体の機能を充実させるため、施設機能の変化と併せて9段階の建設プロセスを計画した。これらの計画によって都市共同体が完結せずに拡大していくことを想定した(図4)。

3-2. ACCを核とした都市共同体のマスタープラン

本計画のマスタープランは対象地域の5つの検討事項を総合して策定した(図5)。連携が想定される既存施設との距離や既存の散策路との連絡を考慮したうえで、農業専用地区周辺の平坦な遊休農地から3つの敷地 SITE A(図7)、SITE B(図6)、SITE C(図8)を選定しACCの施設群を配置した。これにより地下鉄駅からのバスを利用したアクセスや、宿泊施設から学校や農地への移動が容易となり、都市部住民とACCの接続も図る。また、将来的に本計画の敷地周辺に公共的空間が拡充できる。

3-3. 自力建設による公共的建築 建築はすべて、既製の温室用の軽量骨格を木箱の組積ユニットで水平力に強くし

た躯体や鋼製ドラム缶を利用した基礎型枠など、運搬と調達容易な素材をカスタマイズしたもので構成する(図9)。組積ユニットは躯体や内部仕上げ、収納として使用されるものであり、都市共同体が工房で日常的に製作した木箱を短期間で祝祭的に積み上げ、補修が必要となった際に交換が可能なものとする。これらのシステムを採用した建築を、各敷地の状況に対応した形態や機能をもつように設計することで、バリエーションのある公共的空間が活気をもって現象する。例えば、SITE Aでは施設を分棟配置することで中庭を囲み、人々が集まって行う催しに対応した。SITE Bでは細長い敷地に従って施設を雁行配置し、誰もが通り抜ける事のできる縁側をもつ休憩場所とした。SITE Cでは地形の緩勾配に沿って施設を配し、施設間の中庭やピオトープは都市の散策路と繋げた。

4. 結 本計画では、港北NT南部農業専用地区周縁を対象に市民が主導となる公共的空間を構想し、自力建設されるACCを拠点とした都市共同体の構築手法を提案した。これは自力建設によって場所に対する市民の当事者性を構築するという観点において、人々の日常と建てることの関係性を再構築し、公共的施設を近代的手法から脱却した柔軟で持続的なものにする現代的な手法となり得るのではないだろうか。

註1) 政治学や社会学の分野で Stadtgemeinde の訳として用いられるものとは異なり、本論では出来事や活動を担い所として形成される、地縁と必ずしも関係のない現代的な市民の連携と定義する。

■参考文献
1)『ハイデッガーの建築論-建てる・住まう・考える-』(中村貴志,中央公論美術出版,2008年10月)
2)『笑う住宅』(石山修武,筑摩書房,1986年8月)

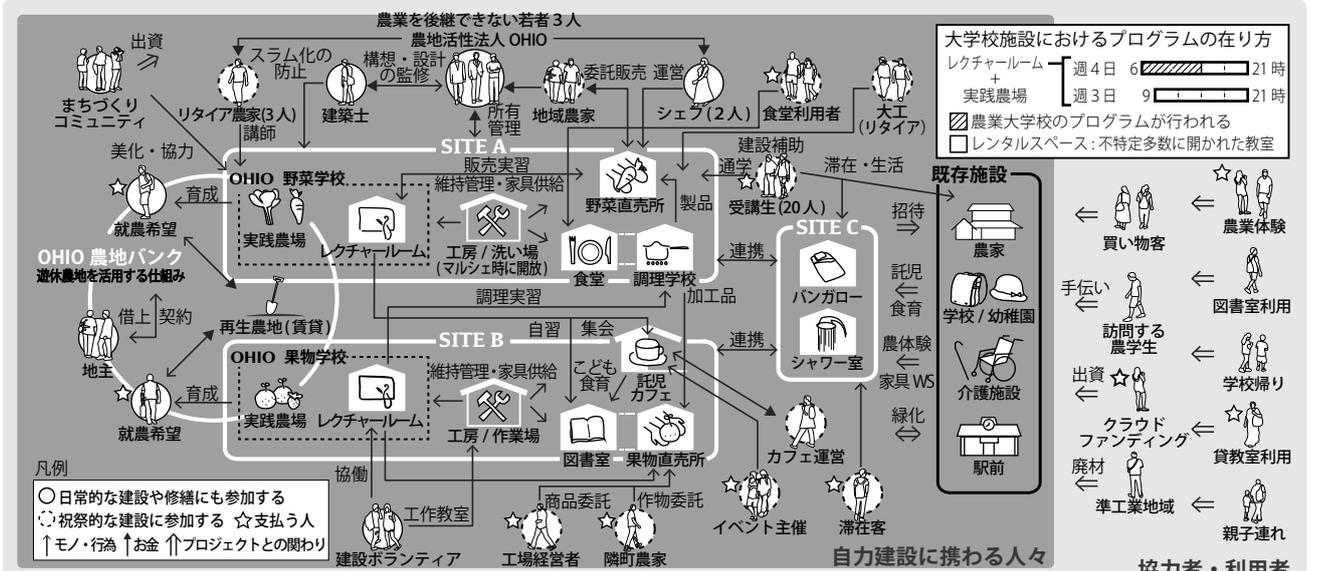


図3. 農地活性プロジェクトを中心とした都市共同体

構想/準備	工期1	2	3	4	5	6	7	8	9
農地活性化を構想 OHIOを設立。 ・合筆申請/農地転用 ・法人格が施設の施主・建設者・所有者かつ運営者となる ・遊休農地を借上げる	栽培用温室を 工房兼建材庫とする SITE A	混構造部材を加え レクチャー棟を建設	工房兼出荷作業用 キャノピーを建設	直売所棟を建設	SITE Cに バンガローを建設 Site C ・学生/ファームス テイの宿を運営 ・SITE Bの製の植樹	SITE Bに第二 レクチャー棟を建設 SITE B ・果物学校を運営 ・出荷場は建材庫と 工房機能を兼ねる	SITE Aに食堂/ 調理棟を建設 ・調理学校のプログラム と食堂を運営 ・シェフに管理委託	SITE Bにカフェ 棟を建設 SITE B ・幼稚園と連携して託 児カフェを運営 ・スタッフに管理委託	SITE Bに工房/図 書室棟を建設 SITE B ・工房機能を移設し、 レクチャー棟で直売 ・図書室を一般開放
5年に1度、定期的に メンテナンスする	・ユニット製作開始 ・廃材の搬入を開始 ・農地を耕す	・野菜学校を運営 ・レンタルスペースと 体験農業を始める	・工房機能を移設 ・家具WSを開演し、 造作家具を製作	・委託作物や学生の 収穫物の販売 ・農地バンクの運営					

図4. 都市共同体の建築とプログラムの構想

都市のゾーニング	アクセス	地形	既存公共施設との連携	散策ルート
<p>活性対象である農専周縁で、かつ実践は場として活用できる遊休農地が集中している地域を計画地とする。</p>	<p>建材の搬入、農家や訪問者のアクセスはバスや車の利用が想定されるため、主な道路やバス停の付近に計画する。</p>	<p>施設の建設や将来的な計画エリアの拡張、施設間の回遊性を考慮し、極力勾配の少ない地域を選定する。</p>	<p>幼稚園や介護施設、スポーツ施設など、既存の公共施設からの徒歩圏内を計画対象として活発な連携を促す。</p>	<p>散策マップを参考に、周遊しなくなるような動線を設定し、施設の配置計画を行う。</p>
<p>市街化区域 市街化調整区域</p> <p>■ 農専地区 ■ 遊休農地</p>	<p>● バス停 -- 主な道路</p>	<p>● 平地部分 -- 等高線</p>	<p>● 施設 ● 徒歩圏 半径 600m</p>	<p>… 散策ルート ● 緑地 / 散策資源</p>

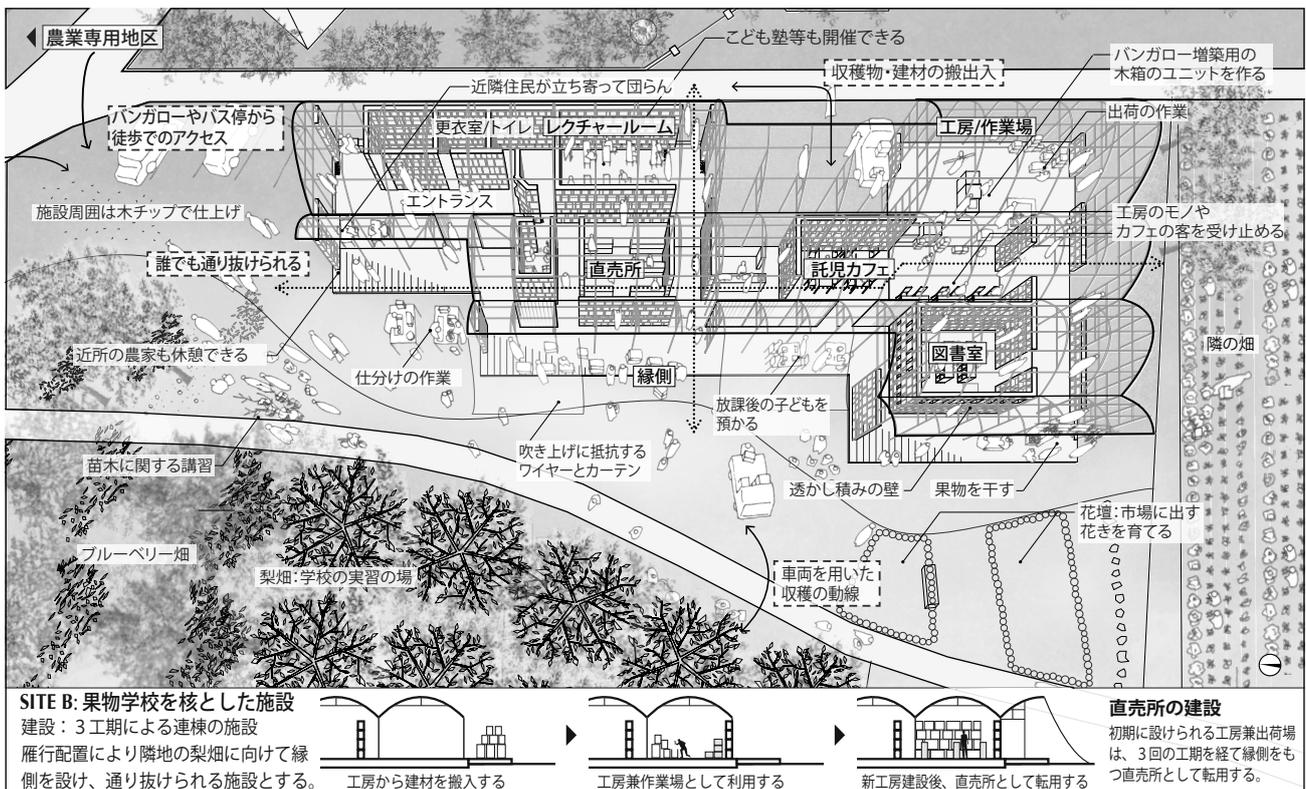
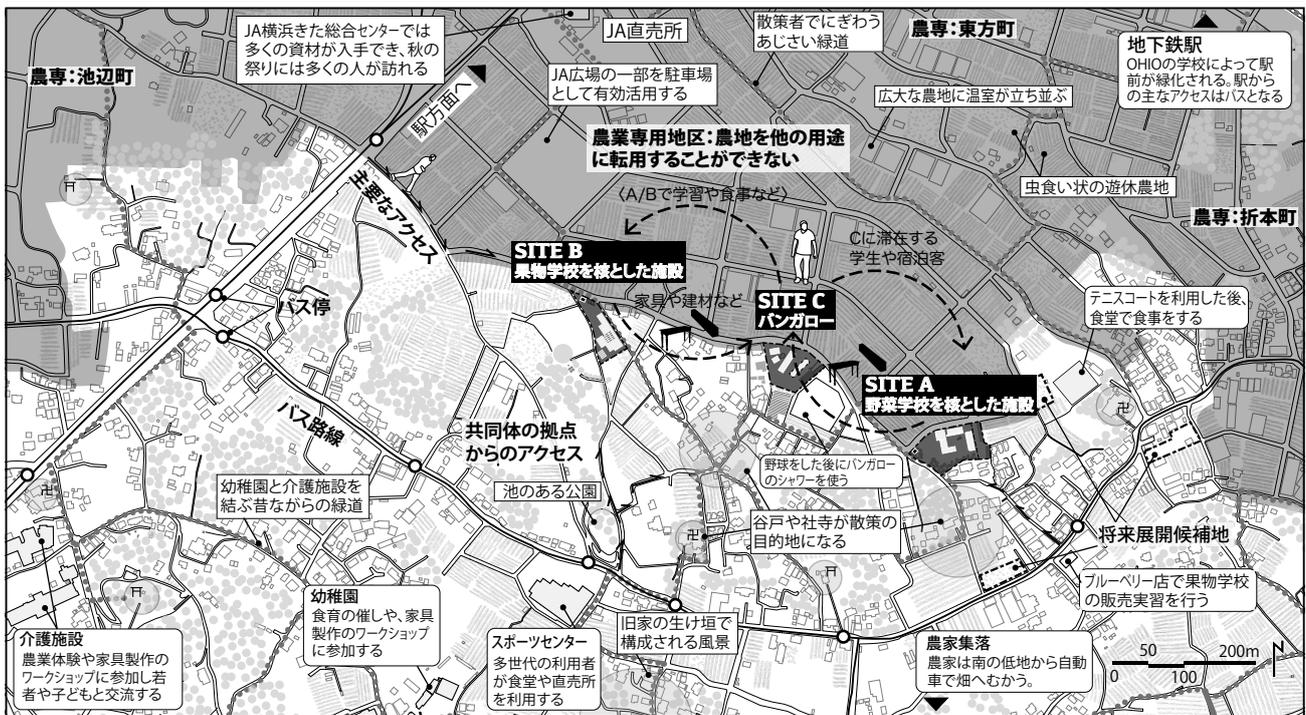
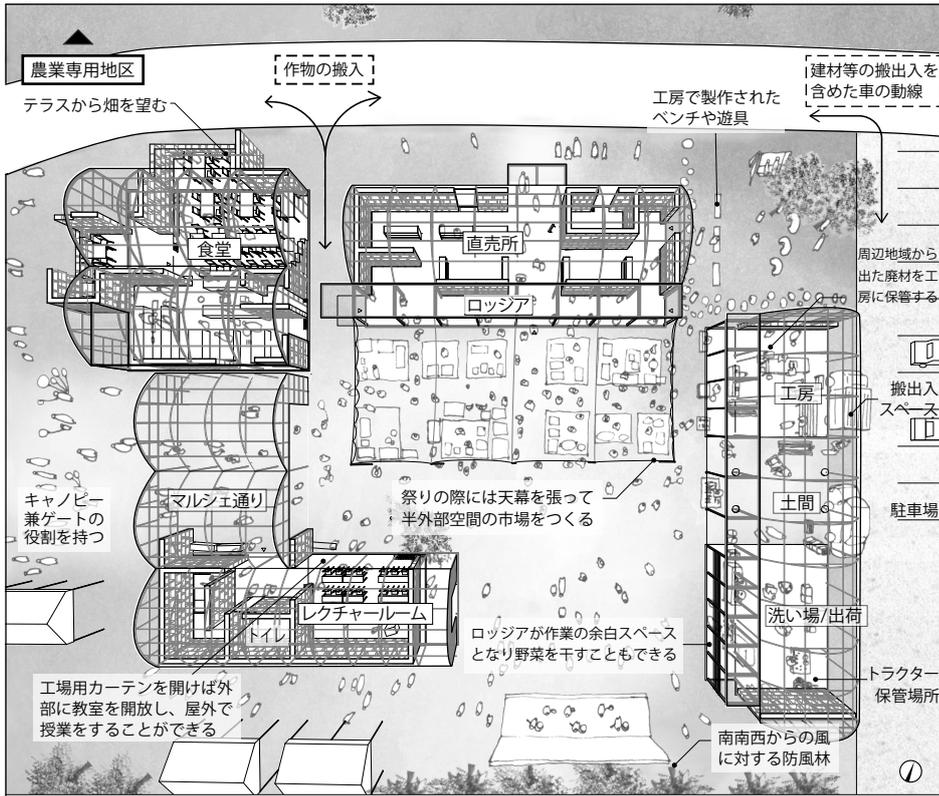


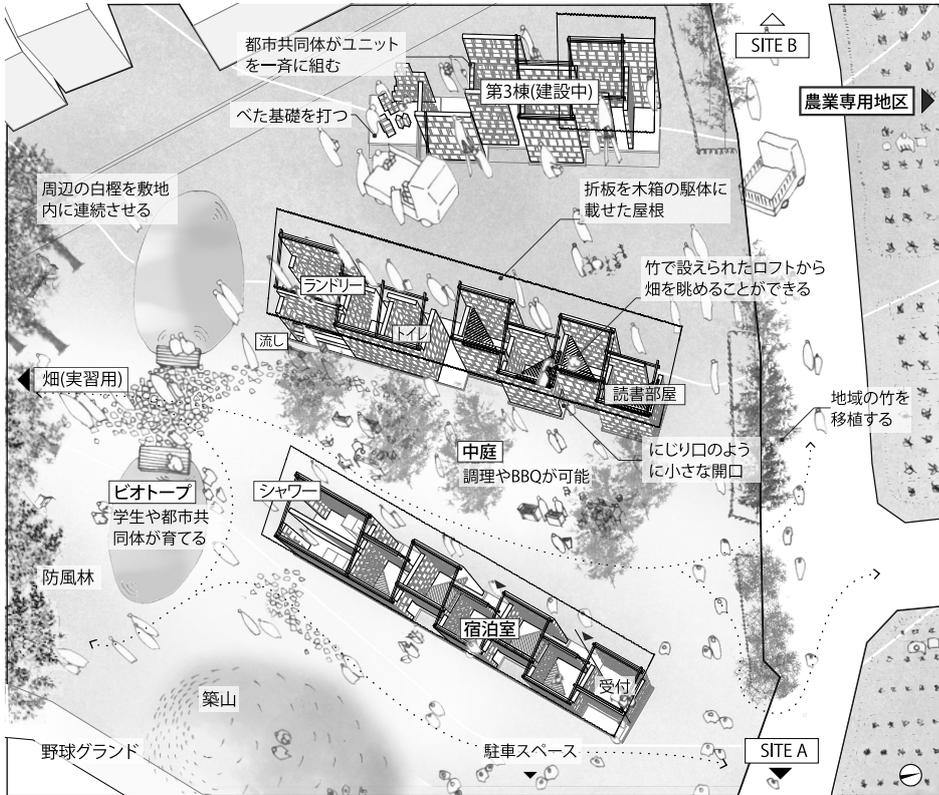
図6. SITE Bの公共空間



SITE A: 野菜学校を核とした施設
 建設：4工期による分棟施設群
 分棟が中庭を囲むことで集まりやすい
 広場をつくり、地域の祭事に対応する。温室の躯体を建てる
 工房として利用する
 組積ユニットを積む

レクチャールームの建設
 第1の建築は、温室を工房として利用した後、教室に転用することで完成する。

図7. SITE Aの公共的空間



SITE C: バンガロー
 建設：同じ平面形での増築が可能
 敷地の緩やかな勾配に従って施設を配置し、南部に共有の憩いの場を設ける。
 工房から搬入する
 壁とロフトを設ける
 梁と屋根を掛ける

バンガローの建設
 工房から木箱を搬入して構造体を積み上げ、横架材と屋根を載せて小さな空間を作る。

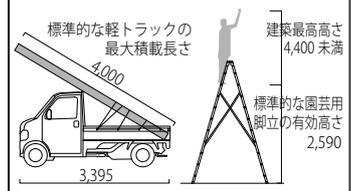
図8. SITE Cの公共的空間

現地調達による建材

ホームセンター	農業用品	駆体
プレカット工場	工具・機材	基礎
工務店・工場	プレカット材	壁
地域農家	木炭材	床
放置竹林	ドラム缶	屋根
	竹	庇
		家具

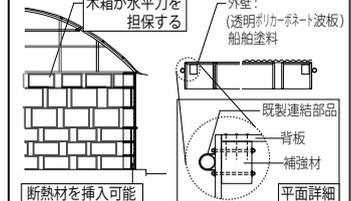
建築は規格品や現地の物資を利用した建材で構成される。工房には日常的に廃材が運び込まれる。

自力建設可能な建築の大きさ



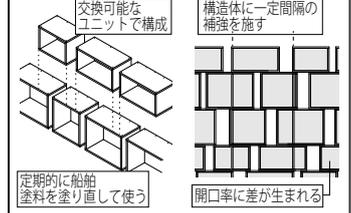
建築の大きさは管理や運搬の面から決定され、目安として農家のもつ車両や道具を参照する。

スチールパイプと木箱による駆体



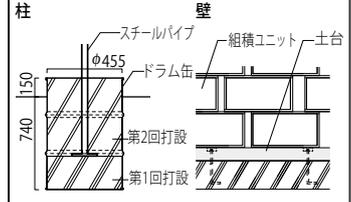
風による水平荷重に弱い軽量なパイプを木箱を組積した壁面によって補強し居室として成立させる。

木箱の組積ユニット



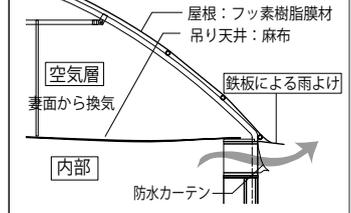
規格寸法の板材で6種類の木箱を製作し、その組み合わせで開口率の操作を行う。

ドラム缶を利用した基礎



鋼製ドラム缶を地中に埋め込み柱の基礎型枠として利用する。組積ユニットには土台を設ける。

簡素な素材による雨仕舞いと屋根



膜素材の屋根に加えて吊り天井を設置することで空気層を設け、表面と壁面上部から熱気を逃がす。

図9. 既製品のカスタマイズによる建築